山と博物館

第34巻 第1号　1989年1月25日　大町山岳博物館

ポカラよりマチャプチャレ（中央）とアンナプルナ山群　撮影　矢口　勝義

ポカラ周辺

矢口　勝義

ポカラは、カトマンドゥから西へ約二〇〇km。飛行機で三〇分、直行バスで約七～八時間かかる。標高約八〇〇mのこの町は、カトマンドゥに比べると、ずっと暖かく感じられ、バナナ・マンゴー・サボテンなどの木も茂り、亜熱帯的な気候であるため、とても過ごし易いところである。

ポカラとは、ネパール語で「湖（ポカリ）」を意味する言葉である。町にはペワ湖、町から少し離れてベグナス湖、ルパ湖がある。

ポカラの町からは、現地語で魚の尾を意味するマチャプチャレ（六九九三m）をはじめとして、アンナプルナ山群、ダウラギリなどの八〇〇〇m級の山々も望むことが出来る。ポカラの町の古いバザールなどには、インド、チベット貿易の通商路の重要な中継地であった昔のなごりの石畳の道や、整備された石段、チョータラ（休み場）などが残っている。

ポカラは、実にのんびりできる町である。ホテルの庭などから、一日中山々を眺めていても飽きることがない。ペワ湖にボートを浮かべて過ごすも良し、自転車を借りてサイクリングも楽しい。ここでは、ゆったりとした雰囲気の中で、山や湖を眺めて過ごすことができる。ポカラの見どころは、美しい景色そのものである。

ポカラはまた、数々のトレッキングの起点、出発点である。アンナプルナ内院へ、またアンナプルナ山群一周コース、あるいは、カリ・ガンダキ川に沿ってゴラパニ、タトパニ方面へのコース。これらのコースは一週間以上はかかるが、一泊か二泊で回るミニトレッキングのコースもある。ミニトレッキングの場合は軽装で気軽に行け、ポカラの町中よりも一層山々を間近に見ることができ、そこに住む素朴な人々に接することができる。そこには懐かしいふるさとに帰って来た気持ちにさせてくれる何かがある。

（日本山岳会会員）

ネパールを旅して

矢口　真理子

ヒマラヤだ。

エベレストをはじめとする八、〇〇〇m級の山々が視界に飛び込んできた時は、さすがに感激。飛行機の窓から青い空の彼方に見えたヒマラヤは雄大で美しいものでした。私にはネパールに来たんだという思いが湧いてきたのでした。諸々の事情で、本当にネパールへ行くことが決まってからほんの一週間後、私は世界の屋根、白き神々の山を目の前に、久しく忘れていた感激とか感動とかいうものの中に居ました。

しかし、トリブヴァン空港に降り立った時に私の胸に去来した不安。これから三週間、大丈夫だろうか。そのまま、また飛行機に乗ってバンコクへ戻りたい衝動に駆られた第一歩でした。

何度もネパールに行っている方や夫の勝義から聞き、あるいは本や写真からの知識を少しは持ってのネパール入りでした。しかし、初めて訪れる未知の国への不安。それは、ネパールへ来るために途中立ち寄ったタイでは感じなかったものでした。私は、もしかしたらとんでもないところに来てしまったのではないかという思いは、夫に訴えても、空港に出迎えてくださった知人のネパール人の方に会っても消えることなく、そのまま私のネパールの旅は始まったのでした。それから三週間―訳の分からないまま見る物すべてが不思議で珍しく過ごしたカトマンドゥでの一週間、落ち着きを取り戻し山々の美しさに感嘆の声をあげたポカラ周辺での一週間、カトマンドゥに戻っての一週間―と時はまたたく間に過ぎゆき、私にとって初めてのネパールの旅は、深く心に残るものとなったのでした。

空港からタクシーに乗り、すぐ私の目に飛び込んできた光景、それは人間と牛と犬とが往来を行き来する光景でした。ここは国際空港で、この道は首都の中心部へ向かう道路のはず。どうして牛や犬が道路にいるのだろう。どうして車の多い道に人が歩いているのだろう。危ない。車のすぐ横を牛が行き交う姿に、ただ驚くばかりの私でした。秩序正しく、管理された世界から、突然、混沌とした自由な世界へ入り込んだような違和感と開放感。夫がとても懐しい気がすると言う光景、違和感など持たなかったから話もしなかったという光景に驚く私でした。国際空港というより片田舎空港と言ったほうが似つかわしい場所に降り立ち、宿泊先のゲストハウスに着いた時はすでに夕闇迫り、タクシーの中から見た沿道だけが私のネパールの第一印象となりました。それは、汚い・臭い・騒々しいと、あまり芳しいものではなかったのでした。

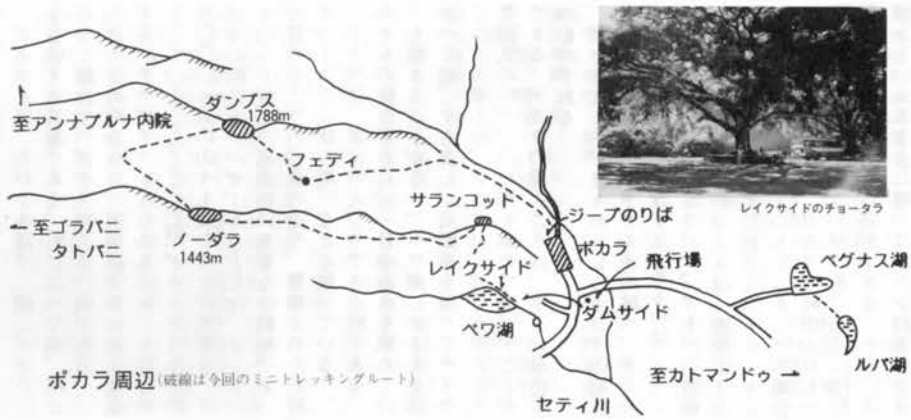
翌朝、目を覚ますと、そこには真青な空が広がり、目映いばかりの光が溢れていました。この快晴の天気は旅行中続き、一滴の雨に遇うこともなく旅を終えました。雨季が終り、私達の行った十一月前後が、ネパールでは一年中で一番旅に良い季節とのことです。ネパールは北緯27°から30°位に位置し、海抜一三〇〇mから一四〇〇mの高さに首都カトマンドゥがある。十一月の気温は13°～25°C位。朝夕はセーターか厚めのジャケットを羽織り、日中は半袖で過ごすという生活。ただし大変乾燥しているため、日中でも長袖で過ごすことも多く、また日陰や室内に入ると、半袖では少し寒いといった気候でした。日差しが強く乾燥しているためホコリっぽく、喉を痛め易いので、街を歩く時は口に布をあてていましたが、それも何日目かにはやめていました。

カトマンドゥでは、街中を散策したり、ボドナートやスワヤンブナートといった寺院を巡り、ゆっくりとゆったりと過ごし、トレッキング・パーミット（許可証）の取得を待って、今回の旅の目的であるトレッキング※に入るため、カトマンドゥを離れポカラへと向かったのでした。

カトマンドゥからポカラへはおよそ二〇〇km。飛行機は利用客が多く、チケットは手に入りにくいとのことで、バスでは八時間、タクシーで六時間ほどという陸路を行くことにしたのでした。

カトマンドゥでは遠くにその峰の一部が見える程度のヒマラヤが、ポカラではすぐそこに大きく見えているのです。ポカラに着いた時は、もうすでに夕暮れでしたが、黒い空を背に月明りの中に見えたマチャプチャレの気高い美しさは印象的でした。

ポカラで迎えた朝は、それは美しい朝でした。空は恐ろしいほどに青く晴れ、山々は神々しいまでに美しくその姿を見せていました。さあいよいよトレッキングに出発。少し心弾



ポカラ周辺（破線は今回のミニトレッキングルート）

フェディにて（ここから歩き）

ポカラのジープのりば（トレッキング出発点）

シェルパとダンプスにてマチャプチャレを望む

む始まりでした。

一日目―ホテルからタクシーでジープ乗り場へ。ジープでフェディへ。このフェディまでは歩く人もいるということでした。そしてジープを降りると、あとの交通手段は歩きのみ。フェディからダンプスへ向けて歩き始めました。トレッキング中は歩くのみ。ある日は登るだけ、ある日は下るだけということもあるという話も聞いていた私ですが、いざ歩き出すとその急な登りに、認識の甘さを思い知らされたのでした。トレッキングは日本の夏山登山と同じだと気付いた時、今回のトレッキングの予定は大きく縮小変更されたのでした。しかも、その急な登り道は、そこに住む人々の生活道だと聞かされ、現に年端もゆかぬ子等が大きな重そうな荷を背に歩いている姿に、ポーターさんを雇い荷物を持ってもらい、杖を片手にする自分が腑甲斐なく、落ち込んでしまうのでした。それでも時間をかけてダンプスに着くと、そこには素晴らしい景色が待っていました。菜の花の黄色い花畑の向こうには桜が咲き、その向こうには、神々の白き峰がそびえ立っていました。

二日目―ダンプスからノーダラを経てサランコットへ。当初の計画では、ゴラパニまで行く予定が、私の足では無理だろうということで、案内してくれたシェルパさんと夫とで地図を見ながら計画を変更。二、三のプランを検討の後、最短コースの超ミニトレッキングに決まり、二日目が始まりました。二日目は急な登りもなく、ゆっくりと歩く一日でした。水牛は少々怖かったけれど、牛、豚などの家畜が放し飼いにされているのにも慣れ、のどかな田園風景の中を、そこに住む人々の生活を垣間見ながら歩く一日でした。

三日目―サランコットからポカラへ。サランコットではポカラの街が真下に、またアンナプルナやマチャプチャレの山々がそこここに望まれ、いざ下山となると名残り惜しいものでした。

こうして二泊三日の短かいトレッキングは終ったのですが、本当は六泊七日のはずでした。また、農協ご飯、割りばし、コップなど持参の情けない私でした。隣で夫が美味しいと食べていても、ダルバート（ネパールの食事）をどうしても食べられなかった私でした。

ポカラでの生活は快適で、カトマンドゥではとても乗って歩く自信のなかった自転車を貸りてサイクリング。自分の背よりずっと高いポインセチアの赤い葉、ブーゲンビリアの花も美しく、山々を眺め、チョータラ（休み場）で憩うという一日は心地良いものでした。ヨーロッパからの旅行者が多い中で、数少ない日本人の旅行者と知り合い、一緒に食事をしたり、本当に楽しいものでした。

カトマンドゥへ戻ってからは、おみやげ屋さんをのぞいたり、旧王宮の一つを見たりしてネパールを離れる日まで過ごしたのでした。

最後に楽しみにしていた、ヒマラヤの山々を飛行機で巡るマウンテンフライトに乗れなかったのが、残念で悔やまれる唯一のものになりました。トレッキングに出る前に申し込み、チケットが手に入っていたにもかかわらず、空港に行くとフライトのない日ですとのこと。しかもドルで払ったお金は、ルピーでしか返してくれないのです。THIS IS NEPAL。何か手違いがあるとこの言葉を何度耳にしたことでしょう。それでも何とか無事にネパールの一部を回る旅を終えることが出来ました。空港に降り立った時の不安など、いつの間にか忘れていました。帰りぎ

サランコットから　ペワ湖

カミツェリン　シェルパー家と

ポカラ郊外

わ、降り立った空港の隣に、新しい大きな空港を建設しているのが目にとまり、ネパールの玄関口も変わろうとしていることを感じました。

旅を終えて一ケ月。目の前に北アルプスを眺めながら田舎で暮らす私でさえ感じた、あのネパールでの伸びやかな豊かさは何だったのだろうと思うのです。私達の生活とは比較にならないほど、不便で、不衛生で、食事は粗末なものでした。でも、あの子供達の屈託のない明るさ逞しさは、どこからくるのだろうと思うのです。

歩けば踏みそうな牛糞との糞戦と匂い、タクシーなどの警笛の騒々しさは馴じめなかったけれど、今度はルクラからエベレスト街道の方へ行ってみたいなと思うこの頃です。

アイスクリームを食べるだけのためにタクシーに乗ってホテルへ行ったり、十五分も歩いたことも、ポカラへ行くために頼んだ、窓を閉めても床からいっぱいホコリの入ってきた車も、ずいぶんと古く、スピードを出すと壊れそうで、運転が乱暴で怖かったタクシーも、値段のわからない、交渉次第で始めの値段の半分以下になるような買物も…。すべて今は懐しい思い出です。

（長野県池田町在住）

※トレッキング

ヒマラヤでトレッキングという場合、登山というより山地旅行、山歩きと訳されている。トレッキングの許可範囲で六、〇〇〇m位の山にも登ることが出来るが、遠征隊の登山とは区別されている。氷雪をいただくヒマラヤの山地、山麓を歩くことに使われることが多い。

博物館だより

アムンゼンと極地探検コーナー

第1回大町・雪と氷の博覧会（1/28～1/30）に協賛し、1Fホールに1/25(水)～2/12(日)の期間設置しています。

アムンゼンはノルウェーの極地探検家で、一九一一年（明治44）、南極点初到達者として知られています。

このコーナーでは、彼が使用したトナカイの毛皮製の寝袋2点を中心として、南極点到達に関する記録写真、彼と初到達を争ったスコット隊（イギリス）の記録写真などとともに、南極の石や氷も展示します。

（月曜休館・通常料金）

バックナンバーのお知らせ(7)

次の巻号のバックナンバーがあります。内容は主なものの紹介ですが、ご了承ください。

第25巻第3号（昭和55年3月）
白沢天狗山の哺乳動物　土岐惣亮
まぼろしの草木　横内　斉

第25巻第4号（昭和55年4月）
雪国の民具(3)　長沢　武
北ア山麓の鳥　三石　紘

第25巻第5号（昭和55年5月）
ニホンカモシカの呼び名と語源　板谷芳隆
借馬遺跡の問題　篠崎健一郎

第25巻第6号（昭和55年6月）
喜作新道の周辺　三井嘉雄
長野県におけるトノサマガエルとトウキョウダルマガエルの分布　下山良平

第25巻第10号（昭和55年10月）
木崎湖の自然　加藤憲二
カモシカの冬毛　千葉彬司

第25巻第11号（昭和55年11月）
鹿島槍ケ岳周辺のコース　松原　繁
御岳山の噴火とライチョウ　平林国男

第25巻第12号（昭和55年12月）
白馬地方の正月行事　田中欣一
どんど焼きの思い出　大日方健

第26巻第1号（昭和56年1月）
冬の仁科三湖で見られる鳥たち　三石　紘
雪と植物と動物　水野昭憲

第26巻第2号（昭和56年2月）
「雪―雪渓―氷河」　竹中修平
着色雪のこと　小野貞雄

第26巻第3号（昭和56年3月）
ライチョウの病気　宮野典夫
スズメの住まない島　―舳倉島―　佐野昌男

（次回につづく）

バックナンバーの請求方法

右記にご希望のものがありましたら、一部100円でおわけします。巻号と部数を明記のうえ、現金書留か口座振替で大町山岳博物館宛ご送金ください。着信次第お送りします。（送料当方負担）品切れの折は最新号でお知らせします。振替の場合、口座番号は長野四―一三二九三です。

山と博物館第34巻第1号
一九八九年一月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL(22)〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）